

# 流行語「夕暮れ族」について

## 服部 このみ

はじめに

吉行淳之介『夕暮まで』（一九七八年九月、新潮社）は妻子のある中年男性・佐々と、処女であることにこだわる若い女性・杉子の一年半にわたる「猥褻な関係」を描いた物語である。この作品は第三十一回野間文芸賞を受賞し、単行本刊行から映画化決定までのおよそ一年半の間に、四十万部を売り上げるベストセラーとなった。また、単行本刊行後には、この小説から由来した「夕暮れ族」という言葉が世間をにぎわせた。

論者は「○○族」に代表されるような、ある一定の傾向をもつ集団を指す流行語と、それを生んだ作品との関係について調べている。本論では『夕暮まで』がベストセラーになった理由を再検討するための前段階として、「夕暮れ族」という言葉がなぜ流行したのかを考察する。

この言葉は、現在および初出時には若い女性と中年男性のカップルを意味するとされるが、雑誌・新聞の用例から中年男性のみを指す言葉として使用されている実態があることを示す。

また、一九七〇年代の中年男性をめぐる状況を整理し、その中でマイナスとプラスの意味が混在する「夕暮れ」という言葉を冠することが、職場や家庭における権威が衰微している状況と、老いに対し肯定的な受容を目指そうとしていた時代の空気に調和したことを指摘する。

### 「夕暮れ族」の用例と特徴

二〇〇〇年以降に刊行された流行語辞典<sup>3)</sup>では「夕暮れ族」について、一九七九年に流行した言葉であり、若い女性と中年男性のカップルを表していること、吉行淳之介『夕暮まで』が由来となっていることが共通して示される。また、一九八三年に摘発された、女子大生やOLを中年男性に紹介する愛人バンク「夕ぐれ族」が合わせて紹介されることもある。

初出については、米川明彦『日本俗語大辞典 新装版』（東京堂出版、二〇二〇年）に『週刊朝日』（一九七九年六月八日号）に吉行淳之介『夕暮れまで』（一九七八年）に描かれたカップル

を取り上げて命名した」とあり、吉行淳之介自身も「夕暮れ族」という言葉を最初に言い出したのは「週刊朝日」であると述べている。<sup>6)</sup>調べてみると、「中年男性と若いコのカップル」「夕暮れ族」の「オリーブの恋」という記事に「夕暮れ族」が次のように定義されていた。

いま、ちまたでは「夕暮れ族」なる言葉がささやかれている。夕暮れといっても、たそがれた人たちを指すのではない。最近ふえた中年男性と若い女性の、翔んでるカップルにつけられた愛称である。原典は吉行淳之介さんのベストセラー小説「夕暮まで」。ともあれ、世の中年族、久しぶりに若い女性に見直されて、目を細めている。(略)

「ねえ、夕暮れ族の生態というルポをやってみたらどお。吉行淳之介の『夕暮まで』以来、中年と女の子のカップルがふえてるらしいよ。いい傾向だなあ、中年族の復権かも……」(略)

夕暮れ族になれるのは、男は四十五〜五十五歳。相手の女性は二十一〜二十三歳と作者の吉行さんはいう。

引用の中で用いられている「翔んでる」は当時の流行語で、従来の社会通念の枠に納まらないことを指す。柴門ふみが回想するように、「当時としては、／＼「女子大生が中年男の愛人になる」

／ということだけで、びっくり仰天だった」<sup>7)</sup>時代だったのかも  
しれない。

ちなみに、この記事で吉行は「へーっ、夕暮れ族なんてことば、本当にはやっているんですか。知らなかった」と驚きつつも、「夕暮れ族」の対象となる年齢を示しているが、女性は「夕暮まで」のヒロイン・杉子の年齢(初めて会った時は二十二で、そこから一年半が経過する)、男性は主人公・佐々の年齢(本文中に「四十を越えて」との記述がある)および吉行自身の作品執筆時の年齢(四十一から五十四)と重ね合わせられている。

その後、同年七月十日付の『朝日新聞』、一九八〇年版『現代用語の基礎知識』に右の引用傍線部とほぼ同じ内容で紹介されていることから、この記事が初出であることは間違いないだろう。<sup>8)</sup>

石原千秋は、愛人バンク「夕ぐれ族」に触れ、一九七九年の流行語である「夕暮れ族」やその言葉の元になった小説「夕暮まで」が「中年男性の若い女性への欲望を暗示する「言葉」として「四年経っても社会的に記憶されて」いたことを指摘しているが、一九八一年二月にリリースされたビートルたけし「俺は絶対テクニシャン」にも「テクニカル・バージン 夕暮れ族よ／＼オリーブ・オイルじゃわびしすぎるぜ」という「夕暮まで」のストーリーになぞらえた歌詞があり、数年にわたって印象を残していたことが分かる。

ただし、初出記事から数ヶ月後に発表された吉行のエッセイによれば、「夕暮れ族」という言葉は「中年の男と若い女性のかかり合いというような規定」から「だんだんその言葉が淋しくなってきた。窓ぎわ族とか中高年層と言うとさしさわりがあるので、そういう言い方の代わりに使われるように」変化したという。<sup>8)</sup>

確かに、当時の新聞・雑誌を見てみると、中年男性のみを指す言葉として使われている用例が目立つ。

#### 【一九七九年八月】

- ① 吉行淳之介の小説『夕暮まで』がベストセラーになって以来、中年男性と若い女性との愛がクローズアップされ、このカップルのことを称して「夕暮れ族」なる言葉も流行っているのだが、中年男性の側からいえば、この「夕暮れ族」なる言葉には、なにか**わびしい**イメージもなしとしない。つまり、肉体年齢からいつての「夕暮れ」のイメージ。<sup>9)</sup>
- ② 一握りのエリートである「日の出族」と、管理職として失格の烙印を押された「夕暮れ族」の二極分化が管理職の中で進んでいるといえよう。<sup>10)</sup>

#### 【一九七九年十一月】

- ③ トルコ嬢にもっとも人気があるのが、例の「夕暮れ族」と呼ばれる四十代半ばから五十代のオジサマたち。<sup>11)</sup>

- ④ ゆうぐれぞく【夕暮れ族】名詞。中年男性と若い女性との関わりを描いた、吉行淳之介の小説『夕暮れまで』の主人公に基づく中年男性の異称。／使用例、夕暮れ族に負けるなヤング。憎つくき夕暮れ族——等々週刊誌の表紙などに多し。<sup>12)</sup>

#### 【一九七九年十二月】

- ⑤ C そう言えば、去年の窓際族にかわって（夕暮れ族）が静かな人気を集めていた。中高年に「勇氣」を与えてくれた功績を評価したい。／B その中高年だけど、ナイス・ミドル改め（シニア・アダルト）なんて言葉も出てきた。（熟年）もあるけど、やっぱり横文字の方がカッコいいね。<sup>13)</sup>

#### 【一九八〇年十月】

- ⑥ 少女と華麗な恋愛を愉しむ「夕暮れ族」を横目で眺めながら、わが「中年ニヒル族」は、たそがれてゆく体の内で疼くものを感じる。<sup>14)</sup>

#### 【一九八三年五月】

- ⑦ 夕暮れ族が描くマイ・セカンドライフ  
いま、／中年男性の／最大の関心事は／これからの／生活設計に／あるという……<sup>15)</sup>

#### 【一九八七年八月】

- ⑧ 球界の主流は今や昭和三十年代に生まれた連中に移っているのである。

が、生き残り<sup>16</sup>だっている。広島衣笠、南海門田、阪急山田、福本、西武東尾の五人である。この五人しぶとく持ちこたえているのだが、彼の目には光彩を放っているように見えた。

彼らは、いわば夕暮れ族である。何年か前にはやった愛人バンクみたいに呼んで申し訳ないかもしれないが、この連中は間違いない近い将来、水平線の向こう側に沈んでいく。今年いっばいなのか、それとも来年なのか、先が見えているだけに、美しく夕陽のように光り輝いて映るのだ。<sup>16</sup>

①はカップルを指す言葉と明言しつつ、中年男性のみにあてはまる肉体の衰えを「夕暮れ」に例えている。②は仕事の出来ない管理職を意味する言葉として用いており、カップルとは無関係の言葉になっている。③④は若い女性との関係にも触れられているが、「中年男性の異称」としている。

⑤はカップルを指す言葉として考えることもできるが、「窓際族」にかかっていることを考えると、「中高年」のみが対象の可能性もある。⑥は「少女と華麗な恋愛を愉しむ『夕暮れ族』」とあり、本来の意味を失ってはいるが、「中年ニヒル族」と比較していることから、男性のみを指すものになっていると思われる。

⑦は首都圏に住む三十代以降の男性を対象にしたアンケート

の結果と、四十代男性の鼎談が掲載された特集のタイトルとリード文である。該当頁にはこの情報しか掲載されていないことから、「夕暮れ族」を「中年男性」と同じ意味で用いていることがわかる。また、それぞれの記事において「夕暮れ亭主」「夕暮れ三人衆」という言葉も用いられており、「夕暮れ」が三十代以上の男性を指す言葉として機能している。

そして、愛人バンク「夕ぐれ族」摘発後の⑧においても、四十歳前後の男性を指す言葉として使われている。

ちなみに、初出記事でも「夕暮れ」といつても、たそがれた人たちを指すのではない。「佐々は、いま人生の黄昏どきを生きている」「夕暮れの、甘く、気だるく、美しい黄色のイメージが、中年の代名詞だったドブネズミ色を払拭しようとしている」と、①同様に中年男性自身を「夕暮れ」と重ね合わせている。<sup>17</sup>

これらのことから、「夕暮れ族」は、カップルを表す言葉として定義されたが、実際は中年男性のみにフォーカスした言葉として広まったことが確認できた。また、いずれの時期においても「わびしい」「たそがれていく」「沈んでいく」など、吉行が言うように「淋しさ」を連想させる言葉や印象とともに語られているようだ。

ただし、吉行は「窓ぎわ族とか中高年層」の代わりに使われたのは一時的で、「もつとも、いままた、中年と若い女の関係をさす言葉に戻りつつあるようです」<sup>18</sup>とも述べている。確かに、

一九七九年末前後の用例(③～⑥)では、若い女性との関係にも触れられているが、その際に男性側のみを指す言葉になっていることは、初出時と違う点だと言えるだろう。

妻子持ちの中年男性と若い女性のカップルの存在が(実態としても倫理的にも)紹介しづらいことや、当時は後に詳述するように中年男性が注目された時代であり、彼らを指す言葉として用いる方が使いやすかったことが、意味が変化した理由として考えられる。

また、その際「夕暮れ」が、「黄昏」(＝盛りを過ぎて終わりに近づこうとする頃)というマイナス要素だけではなく、「甘く、気だるく、美しい」イメージや「光り輝いて映る」というプラスの要素を持ち合わせた言葉であることには注目しておきたい。なぜなら、この意味の二重性こそ、「夕暮れ族」が一九七九年に流行語化した理由であると思われるからだ。

そこで、次に一九七〇年代の中年男性をめぐる状況を整理していきたい。

### 中年男性をめぐる流行語・状況と「夕暮れ族」

「夕暮れ族」の初出記事では、一九五〇年以降の中年男性にまつわる流行語を挙げつつ、当時の彼らの立場を次のように述べている。

思えば「ロマンスグレー」「おじさま族」と、世の中年男性がもてはやされたのは、いまを去る四半世紀昔だった。そのあと、中年族にはられたレットテル、烙印、ロクなものもなかった。高度経済成長のさなか、せつせと働けば「モーレッツ社員」「ソーレッツ社員」とひやかされ、ドルがたまりすぎて、あげくの果ては「ワーカホリック」。はたまた「ドブネズミ」の嘲笑。そして低成長長期の昨今は「窓際族」……。ラッシュ電車にもまれて通勤、汗水たらして、女房子供を養つてるのに、これじゃたまったものじゃない。

それで、いささかのロマンと愁いを秘めた「夕暮れ族」なることばに「待ってました」と、とびついたのかもしれない。<sup>(1)</sup>

右で指摘されているように一九七〇年代の中年男性はネガティブな言葉で表現されることが多かったようだ。より正確には、彼らを含めたサラリーマンを表現する言葉が日本の経済状況に比例してマイナス要素を強めていたといえるが、そのなかでも中高年者(労働省の定義では三十五歳以上)を取り巻く状況は厳しかったようだ。

当時の新聞記事を見てみると一九六〇年代後半以降、人口構成の老齢化・若年労働力の不足から、政府や財界が中高年の雇用促進をたびたび話題にしている。また、一九七二年には勤労

者福祉のビジョンの一つとして定年の延長も検討された。

しかし、一九七三年の石油危機により企業に省力化を呼びかける方向に転換し、一九七六年には定年延長どころか新聞・雑誌上で「四十五歳定昇停止制」が提言されるようになる。<sup>20</sup>一九七八年は円高でますます雇用情勢が深刻になり、「減量経営の荒波を中高年層はもろにかぶ」<sup>21</sup>ることとなった。選定定年の報道が目立つようになったのもこの頃からである。

このように、「高齢化社会に見合った中高年者への福祉対策や定年延長などへの動きとやらはらに、選定定年制の導入、賃金・人事制度の改正といった形で、年功序列、終身雇用を柱とする日本的な雇用形態が」「急速にくずれ出し」た時期に「夕暮まで」は刊行されており、そのことを象徴するように流行語化したのが「代理、補佐等の肩書きはあるが、実際の仕事はなく、新聞や雑誌を読んで一日を送る中間管理者の俗称」<sup>22</sup>である「窓際族」であった。

つまり、当時の中年男性は職場において厳しい状況に置かれていたと言えるが、この時期の記事を見てみると、家庭における権威の低下も問題視されていたようである。

胃が痛むような仕事を終え、疲れて帰宅する。居間に入ると、それまでの歓談がピタリとやみ、シラけた空気が流れる。子供は黙って立ち去り、残った妻もブスツとしてテ

レビのスイッチを入れる——今では、よくみかける中年家庭の情景だ。

中高年の不安定な状況は、家庭の崩壊、という現象にも見られる。(略)

「昔なら、夫が浮気をしても暴力を働いても妻は耐えしのぶしかなかったが、今は夫に隷属する必要がなくなった。女性の就職の機会はいくらでもあるし、夫に頼らなくても生活していくことができるからです。それと、核家族化で個人主義が浸透した結果、妻の方も、自分の好きな生き方をするようになった」

とりもおさず、妻が強くなったということだろう。<sup>23</sup>

ここには「妻が強くなった」とあるが、一九七〇年代は世界的に女性たちの社会進出・差別撤廃を促す制度改革や法整備が進んだ年でもあった。

たとえば、一九七〇年にはアメリカ各地で婦人解放のデモ・集会がおこなわれたことや、日本におけるウーマン・リブ運動が報じられた。<sup>24</sup>一九七五年には国際連合により国際婦人年が設けられ、その前後からメディアにおいても女性差別の問題が頻繁に取りざたされるようになる。「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会」がテレビ番組やCMの差別を告発し、

「私 作る人 僕 食べる人」というインスタント・ラーメンのCMが「社会的影響なども無視出来ない」として放送を中止する<sup>(26)</sup>こととなった。

国際婦人年を契機に政府は婦人問題企画推進本部を設置し、一九七七年には婦人の地位向上をはかるための今後十年の施策を示した「国内行動計画」を発表した。一九七九年には「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」が国連にて採択され、カネボウ化粧品は「来たる一九八〇年代を「女性の時代」と宣言<sup>(27)</sup>した広告を展開した。

一九七〇年代は「なにごとにつけ男が優先する社会に対して、抗議のカネを鳴らすこと<sup>(28)</sup>」のできた時代であり、男性が権威を示しづらいつ世の中であつたのだろう。

そのような状況にある中で、一九七八年には、ニッポン放送が首都圏に住む中年男性五百名を対象に、彼らの意識と生活実態を明らかにするためのアンケート調査を実施した。そこでは家庭内の財産管理・大きな買い物・子どもの教育やしつけ・地域との付き合いにおいて、リーダーシップをとるのは妻だと答えた人が本人という答えを上回り、家庭での存在感の薄さを露呈する結果となった。営業促進部の島海忠は調査には「中年男性をとりまくせちがらい環境の一端<sup>(29)</sup>があらわれている」と述べ、次のように結果をまとめた。

平均寿命がのびたことにより、現代は年の取り方が難しいといわれている。男の40代といえ、人生のうちで最も充実したときであり、家族から頼りにされ、それなりの権威を保持していた。いまやそれは夢物語である。

戦前のように一家に君臨する家長がまったくないなくなり、それにかかわる新しい一家の主はまだわからない。

小遣いは月に4万円。趣味は園芸。家のリーダーは女房。ニッポン放送のこの調査からは、どのように年をとつたらいいのかとまどいながら「どうすりゃいいのかなあ」とつぶやいている、人の好きそうな中年男の姿が浮かんでくるようである<sup>(30)</sup>。

このように、「夕暮れ族」が世間をにぎわせた一九七九年は、中年男性をめぐる状況が大きく変化した時代であつた。職場では年功序列・終身雇用の制度がころうじて保たれ、中高年層の割合が増えていく中で、出来の悪い社員は潜在余剰人員と化し、選定年制や「窓際族」の対象になっていった。また、高度成長の中で家庭を顧みず仕事に身をやつした結果、「日本の中年男性は、今や「家長」ではなくな<sup>(31)</sup>り、「家庭長」である妻に実権をあげわたす<sup>(32)</sup>こととなってしまった。

彼らは職場でも家庭でも身を置く場所がなく、前向きな未来像も描けず「どのように年をとつたらいいのかとまどい<sup>(33)</sup>」うしか

なかったのだろう。そしてそのことが、「ドブネズミ」「窓際族」など、ネガティブな印象を喚起させる言葉との結び付けにつながったのだと思われる。

しかし一方で、日本は一九七〇年から高齢化社会に突入し、一九七八年七月には「世界一の長寿国<sup>①</sup>」となっている。経済の低成長に加え、「古い」「老後」の問題と向き合わなければならなくなった日本が、これまで市場のターゲットになってこなかった中年男性に着目し、中高年の暗いイメージを打破しようとする動きを見せるようになるのも一九七八～九年なのである。ニッポン放送の調査も、その一環として行われた節があり、広告業界を中心に、いくつかの雑誌でその結果がレポートされている。

たとえば、『日経広告手帖』一九七九年八月号には、「中高年時代がやってくる」という特集が組まれている。

石川弘義、井関利明による対談「花開け中年文化」では、「いままでのマーケティングの発想がヤング中心でありすぎた」ことに加え、中年男性が「戦争と戦後高度成長で独自の文化を持ち得なかった」ために、消費者側に「潜在購買力」「何かしたいという気持ち」があるにもかかわらず、企業側がニーズをつかみきれず、「うまくマーケティング的に展開させていく努力」ができなかったことを指摘し、今後の展開によっては中年男性が「目の肥えた消費者」になる可能性があることを示している。

また、広告代理店の電通は、中高年が日本の人口の中心となっていくなかで、「不毛の市場と言われ軽んじられてきた傾向」にあった「中高年マーケット」を、「ヤング市場、ニューファミリー市場に変わる市場として」考えていくことが必要な時代になってきたことを指摘するとともに、「壮年と老年との間に若若しい精神力、また熟達した知恵、経験と能力をもった四十代から老年の前までの人々」を「熟年」と言い換え、イメージアップを図っている。

これからの消費市場を考える時、忘れてならないことは、四十歳以上の中高年がふくれ上がることである。現在では、四十歳以上の中高年が占めるウエートは三人に一人、これが六年後の昭和六十年には二・五人に一人に達する。(略)

ところが、今までの中高年といえ、メディアを通じて送り出される中高年像「働き蜂」、「ドブネズミ」、「窓際族」に代表される通り、ひたむきさどころか頼りないしよぼくれたイメージが一般的である。(略)

しかしこれからは実のある消費市場の主役であり、現在および将来の中高年の生活ニーズを正面からとらえたマーケティング、中高年が自信を覚え共感を抱けるイメージ像がメディアを通じて流される時代が到来するに違いない。

(略)

なお電通では、経済、社会、文化の成熟度の高い五十年代を中心とした中高年層を「熟年」と名づけ、将来的な展望に立って、この熟年を中心とするマーケットの分析を進めている。

中高年をあえて熟年と言い換えたのは、彼らは決して老年予備軍ではない、むしろ、その若若しい精神と肉体と活動力、そして熟練した能力によって社会の中核層だと確信するからである。

この言葉は「夕暮れ族」とともに一九七九年に流行し、「中高年に「勇気」を与え<sup>(33)</sup>」る言葉の一つとして作用したようだ。

ちなみに、「熟年」という言葉を発案したのは薬理学者の原三郎であり、彼の言葉を聞き感銘を受けた森繁久彌も、積極的に「熟年」を提唱した<sup>(34)</sup>という。一九七八年の労働省広告には森繁が起用され、「ひと昔前は、50をすぎると老年と言われましたが、今は違います。気力も体力もあるしこれまで蓄えてきた力が人生で最も円熟するときなんじゃないですか。私だから「熟年」と呼んでいるんです<sup>(35)</sup>。」と書かれています。このことから政府もまた、前向きな中高年のイメージを生成しようとしていた様子が見て取れる。

そして「夕暮れ族」も、「夕暮れの、甘く、気だるく、美しい黄色のイメージが、中年の代名詞だったトブネズミ色を払拭し

ようとしている<sup>(36)</sup>」とあるように、「夕暮れ」という言葉が相対的にプラスのイメージとして働いたのであり、中年男性と若い女性の関わりという点においても、「老年予備軍」としての中年(男性)を否定する要素として注目されたのだといえる。

ここまで「夕暮れ族」という言葉がなぜ流行したかについて考えてきた。辞典では中年男性と若い女性のカップルであることのみが説明されるが、流行語となった理由は一九七〇年末の中年男性の現状を上手く言い表していたからだと言える。

「夕暮れ」という言葉は、中年男性の肉体的な衰えに加え、職場や家庭における権威が「黄昏」を迎えているという現実を突きつける言葉であった。一九七〇年代の中年男性にまつわる流語は労働に限定するものが多かったが、「夕暮れ」はさまざまな場面において使用可能であることに加え、それ以前の表現に比べて聞こえもよく、使いやすかったのだろう。一方で、高齢化社会において人口の中心となっていく中高年層のイメージを見直そうという力が働く中で、まだ「若若し」く光り輝くことができるという明るさを想起させる言葉でもあった。そのような時代の流れと結び付いたからこそ、「中年族の復権」を表しうる言葉として、流行したのではないだろうか。

おわりに

本論では、流行語「夕暮れ族」の用例の確認と流行時の時代状況の整理を通して、「夕暮れ族」が流行語となった経緯の確認・分析を行った。

その結果、「若い女性と中年男性のカップル」と定義されていた「夕暮れ族」が、実際は男性側のみを指す言葉に変化していたことが明らかになった。その際は、中年男性の肉体の衰えや、職場や家庭における権威の低下が、「夕暮れ」に言い換えられる形で使用されていた。

また、「夕暮れ」という言葉からは盛りを過ぎ、終わりに向かっていくというマイナスの意味合いではなく、美しさを感じさせる要素も含まれている。高齢化が進み、「老い」や中高年層への評価を捉え直そうとする中で、「夕暮れ族」という言葉が、年齢・肉体の盛りを過ぎたことを示しつつも、それを成熟というプラスの要素に捉え直すものとして受け入れられ、流行語化したのだらう。

今回は、流行語の分析に終始し、元になった作品とのつながりについて考えることができなかった。しかし、今回の調査と関連づけて考えた時、「夕暮れ族」が中年男性を指す言葉として流行したことは、「夕暮まで」が特異な男女の物語として消費されただけでなく、中年男性の物語として読まれていたことを示しているのではないかと思われる。

吉行は『夕暮まで』について、「なぜベストセラーになったのだらう。エロチックな枠組および細部のためだらうか。当然、その要素は大きく作用しているだらうが、それだけなのか。よく分らない。」<sup>37)</sup>と述べており、扇情的なモチーフをベストセラー化の理由の一つに挙げつつも、釈然としない様子である。この作品は男女の物語として分析・考察されることが多いが、「男女の世界を赤裸々に取り扱いながら、読んでいて、不思議に猥雑なものを感じさせられ」ないという声が複数の評者から挙がっており、「性」を媒介として「老年に向い合うこと」<sup>38)</sup>を主題としているという意見も見られる。また、『夕暮まで』では主人公・佐々の職業や家庭に関する詳細な記述はほとんど書かれていない。明確な意思もたず、「女たちのあいだを、何も感情の発動がないような表情で漂っている」<sup>39)</sup>だけである。「夕暮まで」が『驟雨』よりいいんです。なんにもないところがいい。<sup>40)</sup>と空虚さを指摘する声も見られる。

流行語の意味の変遷や時代状況を考えた時、読者もまた『夕暮まで』の佐々から、職場にも家庭にも確固たる基盤を築けない中で年を重ねていかなければならない空虚さを読み取り、自己と重ね合わせていたのではないだろうか。作品の詳細な分析については、別稿を期したい。

## 注

- (1) 吉行淳之介『夕暮まで』新潮文庫、一九八二年
- (2) 「夕暮まで」桃井主演で 吉行文学久々の映画化」『朝日新聞』一九八〇年五月十三日付
- (3) 論者が調べた範囲で「夕暮れ族」が掲載されていたものは、加藤迪男編『20世紀のことばの年表』（東京堂出版、二〇〇一年）、『新語・流行語大全』（自由国民社、二〇〇六年）、『暮らしの年表／流行語 1000年』（講談社、二〇一一年）、米川明彦『日本俗語大辞典 新装版』（東京堂出版、二〇二〇年）であった。
- (4) 吉行淳之介「女について」『広告批評』第七号、一九七九年十一月
- (5) 柴門ふみ「日本レンアイ文学入門（19）」『本の旅人』二〇〇五年九月号
- (6) 「はやりことば白書 79年前半」（『朝日新聞』一九七九年七月十日付）では「夕暮れ族」50歳前後+22歳」という小見出しとともに「中年の復権か、窓際族の変身か。『夕暮れ族』もあらわれた。最近ふえた中年男性と若い女性の翔（と）んでいるカップルにつけられた愛称。原典は吉行淳之介さんの小説『夕暮まで』。夕暮れ族になれるのは男性五十歳プラスマイナス五歳、女性二十二歳プラスマイナス一歳、とか。」とあり、一九八〇年版の『現代用語の基礎知識』（自由国民社、一九八〇年）には、「若い女性と中年男性の恋のカップル。出典は、吉行淳之介の野間文芸賞受賞小説『夕暮まで』。夕暮れ族になれるのは、男性五〇歳プラスマイナス五歳、女性二二歳プラスマイナス二歳。中年の復権、窓際族の開き直りか。」とある。
- (7) 石原千秋「言葉と戯れる恋人たち」吉行淳之介「夕暮まで」『文蔵』二〇〇九年十月号
- (8) (4)に同じ
- (9) 「夕暮れ族」の間で大ブームの「健康塾」30『週刊ポスト』一九七九年八月十日号
- (10) 「夕暮れ族」を襲う「部課長・3段階定年制」の凄絶白書『週刊ポスト』一九七九年八月十七日号
- (11) 「花の夕暮れ族（シルバー）向きソフト型トルコの妙技」『週刊現代』一九七九年十一月二十二日号
- (12) 「夕暮れ族は翔んでるか!!」『エルダー』一九七九年十一月号
- (13) 「1979 世相 流行語」『読売新聞』一九七九年十二月三十日付
- (14) 「夕暮れ族」になれなかったこの中年男たちの寂しき発情『週刊サンケイ』一九八〇年十月九日号
- (15) 「夕暮れ族が描くマイ・セカンドライフ」『婦人生活』一九八三年五月号

- (16) 「山本浩二の週間球談『夕暮れ族』が三冠王を討ち取った!」『週刊文春』一九八七年八月六日号
- (17) 「中年男性と若いコのカップル『夕暮れ族』の『オリーブの恋』」『週刊朝日』一九七九年六月八日号
- (18) (4) に同じ
- (17) (17) に同じ
- また、それぞれの言葉の登場時期についても掲載しておく。
- ロマンズグレー：一九五四年（初出は飯沢匡の小説「ロマンズ・グレイ」）、おじさま族：一九五五年（中村メイコ『ママ横をむいてて』がきっかけかと思われる）、モーレッツ社員：一九六九年、ソーレッツ社員：一九七〇年、ワーカホリック：一九七二年、ドブネズミ：一九六七年（花森安治『どぶねずみ色の若者たち』が初出。誰に命令されるでもなく、一様にグレーのスーツを着用する若者たちを批判する言葉として用いられ、その後も主に若いサラリーマンを指す言葉として使われることが多いが、一九七五年にはサラリーマン全体を指す用例も確認できる）
- 窓際族：一九七八年
- (20) 「中高年受難時代をどうするか」『朝日新聞』一九七六年十一月八日付
- (21) 「天声人語」『朝日新聞』一九七八年九月二十二日付
- (22) 「崩れる年功給・終身雇用」『朝日新聞』一九七八年十一月十四日付
- (23) 『現代用語の基礎知識』一九七九年版、自由国民社、一九七九年
- (24) (14) に同じ
- (25) 「ウーマンパワー大行進」『朝日新聞』一九七〇年八月二十七日付、「ウーマン・リップ」『男性天国』に上陸一九七〇年十月四日付など
- (26) 「つくる人 食べる人」『差別CM やめます』『朝日新聞』一九七五年十月二十八日付
- (27) 「Kanebo 歴史コラム 第7回」ブランドプロモーションとパーパス・ドリブン・ブランディング」『Kanebo』[https://www.kanebo-cosmetics.co.jp/company/history-column/column\\_07.html](https://www.kanebo-cosmetics.co.jp/company/history-column/column_07.html) [二〇二二年十一月三十日閲覧]
- (28) 「12 POSTERS」『ほぼ日刊イトイ新聞』<https://www.1101.com/tsuchiyakoichi/setan/2013-08-26.html> [二〇二二年十一月三十日閲覧]
- (29) 鳥海忠「家庭生活における現代、中年男性」『セールスマネジャー』一九七九年四月号
- (30) 今井俊博、安部雍子「消費者として 親として 社会人として」『オードイェンスとしての男たち』『月刊アドバタイジング』一九七九年三月号

- (31) 「日本、世界一の長寿国に」『朝日新聞』一九七八年七月二日付
- (32) 電通熟年グループ「中高年マーケットを考える」『日経広告手帖』一九七九年八月号
- (33) (13) に同じ
- (34) 「熟年」論争の運命は？ 広告業界も仕掛け人」『朝日新聞』一九八一年四月五日付
- (35) 「広告」政府広報 労働省」『朝日新聞』一九七八年十一月十四日付
- (36) (17) に同じ
- (37) 吉行淳之介「自作発見『夕暮まで』」『朝日新聞』一九八九年十一月五日付
- (38) 井上靖「『夕暮まで』を推す」『群像』一九七九年一月号
- (39) 石原慎太郎、坂上弘、中上健次「読書鼎談 吉行淳之介『夕暮まで』」『文藝』一九七九年一月号
- (40) 中島梓「情事を通して描く異形の恐怖とエロティシズム」『朝日ジャーナル』一九七八年十一月十日号
- (41) 桂秀美、富岡幸一郎、福田和也、大杉重男（座談会）小説の運命Ⅰ」『新潮』一九九五年八月号

（はっとり・このみ 本学非常勤講師）